

[010] 文獻探究表紙奥付等

<http://hdl.handle.net/2324/10119>

出版情報：文獻探究. 10, 1982-09-15. 文獻探究の会
バージョン：
権利関係：



今井源衛他編著 『古筆手鑑 芦屋釜』

本書は、某氏所蔵の手鑑「芦屋釜」（仮称）についての詳細な調査研究報告である。本書の中心は、いうまでもなく全頁数の三分の二以上を占める解題にある。本手鑑の概要を述べた「総説」と各断簡ごとの翻字・解説を行った「各説」とからなるこの解題によって、本手鑑の全容が残すところなく解明されている。巻末には、主要断簡図版ならびに伝筆者名索引が付される。

本手鑑は、鎌倉初期より近世中期に至る諸家の伝称作品一五二葉を押すが、一般的な手鑑の形と比較して配列に未整理・不統一の感が強く、また『古筆名葉集』などの記述と合致する断簡が少ないことなどから、「近世古筆家の手垢をつけぬウブな面を有している」（総説）と目される。

断簡について見ると、天平経などの名物切がほとんど含まれず、仮名の古筆の占める割合のすこぶる高い点が、国文学研究に携わる者にとって、特に興味を惹くのであ

るが、中では、鎌倉中期の写と見られる伝世尊寺行能筆『建礼門院右京大夫集』巻頭断簡が、久曾神昇博士の近著で注目すべき新資料として取り上げられており、御存知の方もあろう。その他、室町期の未詳歌合、あるいは未詳私家集の断簡と思われるものもあり、定家の記録切も真筆に疑いなく、学術的価値は決して小さくないものがあると思われる。

ここ数年は古筆ブームともいうべく、国宝の著名な手鑑の複製が次々と刊行され、また古筆鑑定の福音ともいうべき小松茂美博士の労作『日本書蹟大鑑』二十五巻も完成し、これまでなら親しく披見することなど夢のまた夢であった貴重な文献が、ほとんど居ながらにして利用できるようになった。本書のごときは、こうした基礎資料を縦横に駆使することのできる今なればこそ、はじめに完成しえたものといえよう。それにしても、従来まったくその存在さ

え知られることのなかった本手鑑に、創目に値する新資料が少なからず含まれていたということは、こうした発見が今後のより広汎な調査によって大いに期待できるといふことではあるまいか。本書のような調査研究が多くの手鑑についても次々と報告されることを待ち望みたい。

なお、本書に先立ち、昭和五十六年度中古文学会秋期大会（於梅光女学院大学）において、今井先生が本手鑑の概要について研究発表とされている。（辛島記）

（昭和五十七年二月文献探究の会刊 B五 判 一一九頁 非売品）

※本書は、文献探究の会の処女出版です。購入を希望される方は編集部まで御一報下さい。頒価は一部二〇〇円（送料共）です。（編集部注）